
売られた花嫁

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

売られた花嫁

【Nコード】

N3587F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

村の娘マジエンカ。結婚仲介人によって思わぬ結婚話を出される。これに対して彼女の恋人イエニークは思わぬ行動に出るがこれが何と。スメタナが作曲したチェコのオペラを小説にしました。村での微笑ましい結婚での騒動です。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

第一幕 結婚仲介人

十九世紀中頃のボヘミア。時代は刻一刻と変わり世界は次第に忙しくなるうとしていた。当時ここを勢力圏に置いていたオーストリアも例外ではなく民族運動を受けてオーストリア＝ハンガリー帝国という二重国家となった。ハプスブルク家を頂点としながらもそれぞれの民族意識の高まりを抑え切れなくなりつつあった。そうした国家であつた。

その中でボヘミアは特別な位置にあつた。欧州の丁度中央に位置するこの地域は古来より重要な場所とされてきたのである。

ドイツの宰相ビスマルクはこう言つた。

「ボヘミアを制する者が欧州を制する」

と。彼は一代の戦略家であり、それだけにその言葉は重みがあつた。

ここはチェコの中心地域であつた。美しき都プラハもあり農村はのどかで整つていた。人々はそこでゆつたりとした、それでいて素朴な生活を送つていたのである。

その中のある村での話である。今日は教会の聖別式である。春の訪れも同時に祝う目出度い日である。

人々は質素な造りの教会から出ると右手にある酒屋に入つていった。そこでは恰幅のいい旦那とおかみがもう笑顔で待っていた。

「いらつしやい」

「飲んでくんだろ」

「勿論だよ」

村人達は二人に笑顔でそう答えた。

「親父、席用意してくれ」

「おかみさん、ビールある？」

「ここにたんまりと」

「ソーセージは？」

「今茹で終わつたよ」

「チーズは？」

「切つて置いてあるよ。安くしとくからね」

こうして人々は酒屋の外と中で次々に卓を囲んだ。そして乾杯をはじめた。

「よし、飲むぞ！」

「おう！」

老いも若きも男も女も口々に酒を讃えながら飲む。皆笑顔に包まれていた。

しかしその中で一人浮かない顔をして入口のすぐ側にあるテーブルで座っている少女がいた。金髪で小柄な少女である。

青い瞳が非常に美しかった。そして少し太めながらそれがかえって健康的な可愛さとなつてあらわれていた。

ボヘミアの民族衣装に身を包んでいる。彼の前には同じくボヘミアの服を着た若者がいた。豊かな金色の髪に小粋な表情をした若者である。目は緑で少女の目が湖の様であるのに対して彼のそれはまるで森の様であつた。帽子には洒落た白い羽根が付けられている。

「マジエンカ、どうしたんだい」

彼はその少女に対して問うた。

「随分浮かない顔をして」

「うん」

マジエンカと呼ばれた少女はそれを受けて顔をあげた。あどけない顔が何やら憂いで沈んでいた。

「ねえイエニーク」

「何だい」

若者は名を呼ばれて応えた。

「私もそろそろ結婚していい年頃よね」

「うん」

この時代結婚する年齢は低かつた。マジエンカ程の年齢になると

もう結婚するのが普通であつた。

「それでね。母さんに言われたの」

「誰かと結婚しろって？」

「ええ。それでもうすぐ家に結婚の仲介人さんがやって来るの」

この時代この地域にはそうした職業もあつたのだ。結婚の仲介を
生業とする人達である。

「ふん、それで」

「どうしたらいいの！？私知らない人や嫌いな人と結婚なんかした
くないわ」

「安心して、マジエンカ」

イエニークはにこりと笑つてマジエンカに対してそう言った。

「何で」

「よお」

ここで周りの村人達が二人に声をかけてきた。

「美味しい酒も飲んだし踊らないか？」

「一緒にな」

「私はいいわ」

マジエンカは暗い顔のままそれを断つた。

「今は気持ちが晴れないから」

「そうなの」

「そんなの踊ればすぐにさっぱりするのに」

「まあいいじゃないか。俺達だけでも踊ろう」

「そうだな」

人々は教会の前の広場で輪になって踊りはじめた。二人はテーブ
ルに向かい合つて座つたまま踊りを見ながら話を再開した。

「それでね」

「うん」

イエニークはマジエンカの言葉に頷いた。

「私本当に困つてるのよ。一体どうなるか」

「本当に心配なんだね」

「当然よ」

その何気ない言葉にさえ頬を膨らませた。

「相手は噂によるとミー八さんとこの息子さんらしいけれど」

「ミー八さんの」

イエニークはそれを聞いてその緑の目に奇妙な光を宿らせた。ミ

ー八はこの村で一番の長者である。

「まだよくわからないけれどそう聞いたわ」

「そうなんだ」

イエニークはそれを聞きあらためて頷いた。

「どうしたらいいかしら」

「そうだなあ」

「ねえイエニーク」

マジエンカはまた彼に問うた。

「これを聞いても何とも思わないの？」

「何を？」

「私がお嫁さんに行くことよ。何か全然驚いても心配してもいない
ようだけれど」

「それは誤解だよ」

イエニークはまずはそれを否定した。

「当然心配しているさ。他ならない君のことだから」

「そうかしら」

だがマジエンカはそれを聞いてもまだ懐疑的であった。

「私にはそうは見えないのだけれど」

「それは気のせいだって」

彼はまた否定してみせた。

「本当かしら」

「僕を信じれないっていうの？」

「そうじゃないけれど」

マジエンカは逆に言葉を曇らせた。

「けれど貴方つてもてるから」

「まさか」

彼はそれを笑って否定した。

「それは買い被りだよ。僕はそんなにもてないよ」

「嘘よ」

「嘘なもんか。それにもてたってね」

「ええ」

「僕は君にしか興味が無いんだから。それは信じて欲しいな」

「どうかしら」

マジエンカはすねてそう言葉を返した。

「今だって何か他人事だし。信じれないわ」

「おやおや」

お手上げといったジェスチャーをしておどける。

「どうしてもかい？」

「じゃあ誓えるかしら」

「勿論。君だけを見るってね」

「それならいいけれど」

だがまだ不安は消えなかった。

「本当に他の女の人に興味はないのね」

「だから何度も言う通り」

それでもマジエンカは不安なようであった。

「けれど一言言いたい」

「何だい？」

「浮気したら酷いんだから」

「おいおい」

イエニークはむくれるマジエンカを宥めにかかった。

「本当に焼餅なんだから」

「パンを焼くのは得意よ」

そう返す。

「私は嫉妬深い女ですからね」

「確かに君の焼くパンは美味しい」

イエニークは冗談交じりにそう言う。

「けれど僕はそのパンに惚れたんだ。だからこの村にいる」
「イエニーク」

「僕はね、ある豊かなお百姓さんの家の子だったんだ」
そして今度は自分の身の上を語りはじめた。

第一幕その二

「けれどお母さんが早く亡くなつてね。それでお父さんは再婚したんだけれど」

「新しいお母さんに何かあつたのね」

「うん。何かとい辛くてね。お母さんが違つと。そういうわけで村を出てそれで今はこの村に置いてもらつているんだ」

彼は地主の一人の使用人をしているのだ。気のいい優しい主であり彼に対してもよくしてくれる。彼はそれを心から感謝していた。

「そうだったの」

「うん。おかげでね、色々あつたさ」

「けれど今はこうして私の前にいる」

「有り難いことに。これでわかつてくれたかな」

「ええ」

マジエンカは頷いた。

「だからこそ僕は君と離れたくはないんだ。やっと巡り合えたからね」

「嬉しいわ。じゃあもうずっと離れたくはない」

「僕も」

「最後の日まで。それまで私達はずっと一緒よ」

「うん」

そこに誰かがやって来た。がっしりとした体格の中年の男だ。

「あ、お父さん」

マジエンカはそれを見て声をあげた。太った恰幅のよい中年の女の人と赤い服を着た痩せた男も一緒だ。

「お母さんも。私を探しているのね」

「結婚のことかな。あれが誰かはまだよくわからないけれど」

イエニークは赤い服の男を指差しながら言った。顔も痩せていて鼻が異様に高い。何処か木の人形に似ていた。

「どうやら僕は今は身を隠した方がいいみたいだね」
そう言つて席を立つた。

「それじゃあまた」

「行つちやうの？」

「うん、またね」

「それじゃ」

二人は別れを告げた。イエニークは三人に見つからないようにそつとその場を後にするのであつた。

三人は広場の方へやつて来た。何やら色々と話をしている。

「それではクルシナさん、ルドミラさん」

「はい」

がつしりとした男と恰幅のいい女が赤い服の男の言葉に頷いた。

「先程お話した通りで宜しいですな」

何やら念を押しているようであつた。

「ええ、勿論です」

クルシナと呼ばれた男の人がそれに応えた。

「母さんもそれでいいね」

「ええ」

ルドミラもそれに頷いた。この二人がマジエンカのものであればクルシナの髪の色、ルドミラの顔立ちはマジエンカのものであつた。特にルドミラは歩き方もマジエンカによく似ていた。いや、娘が母親に似たと言つた方が早いであらうか。

非常によく似ていた。

「そついうことです。私共に異存はありません」

「わかりました」

男はそれを聞き満足そうに頷いた。

「それは何よりです。このケツアル」

名乗りはじめた。

「この頭には知恵が詰まつております。これをふんだんに使わせて頂きましょう」

手に持っている傘で自分の頭を突付いてみせる。何か木を叩く音に似た音が聞こえてきた。その外見と妙に合っていていささか滑稽な音であった。

「お任せ下さい」

「はい」

二人は頷いた。そして広場にやって来た。

「今日娘はこの教会へ行っておりまして」

「はい」

「まずはどんな娘か御覧頂きたいのですが」

「いや、それには及びません」

だがケツアルは胸を張って笑ってそう答えた。

「娘さんは十八でしたな、今年で」

「はい」

「それならば問題はなしです。女の子はその年頃が一番可愛い」

どうやら色々と見てきたようである。少なくともそうは見える。

「ですから容姿は問題なし。性格は御聞きするところによると非常に素晴らしい」

「有り難うございます」

「それだけ揃えば良縁は自分の方からやって来ます。さて、花婿ですが」

「はい」

実はそれが最大の心配事である。二人はゴクリ、と息を飲んだ。

「ミールさんを御存知ですね」

「はい」

村で一番の長者である。

「その方のご子息がそのお相手です」

「何と」

二人はそれを聞いて同時に驚きの声をあげた。

「それは本当ですか!？」

「はい」

やはり胸を張ってそう答える。

「どうですか、いいお話でしょう」

「ええ」

「それをまとめるのが私です」

そしてあらためてこう語った。

「確かあの人には息子さんが二人いましたね」

クルシナがここで言った。

「前の奥さんと今の奥さんの間にそれぞれ」

「あれっ、そうですか!？」

ケツアルはそれを聞いて少し驚いたようであった。

「それは初耳ですが」

「そうなのですか」

「ええ」

素っ頓狂な顔にも見える。丸い目をさらに丸くさせたからだ。

「一人だけだと思っておりましたが」

「あれっ、そうだったかな」

今度はクルシナが首を傾げた。

「二人いた筈ですが」

「私が知っているのは一人です」

ケツアルはそう述べた。

「もう一人いたのですか。しかし今は一人」

「それでどんな若者ですか」

「名前は」

「ヴァシエクといいます」

「ヴァシエク」

「はい。気のいい若者ですよ。純朴で」

それは本当のことであった。だが全てを言ったわけではなかった。

「それについてもご安心下さい」

「わかりました」

二人はそれを聞いてとりあえずはホッとした。

「お金持ちで性格もよいなんてそうそうありませんよ」
「そうですね」

「あなた、中々いいお話よ」
ルドミラが夫にそう囁く。

「やっぱりこれでいいんじゃないかしら」
「そうだな」

クルシナもそれに頷く。

「じゃあ後はお約束通りケツアルさんにお任せするということで」
「はい」

満足そうに頷いた。そして酒屋の扉の前に座るマジエンカに気付いた。

「あ、マジエンカ」

クルシナとルドミラがまず気付いた。そしてケツアルに紹介する。

「あそこに座っているのが娘です」
「ほう」

ケツアルは彼女を見て声をあげた。

「可愛い娘さんですな」
「有り難うございます」

「これはいい。ヴァシエク君とお似合いですよ」
「そうなのですか」

「ええ。では行きましょう」

三人はマジエンカの座っているテーブルに向かった。そして彼女に声をかけた。

「マジエンカ」

「あつ、お父さんお母さん」

マジエンカはここではじめて気付いたふりをした。

「どうしたの、こんなところまで」

「実はね、御前の結婚のことで」

クルシナがそう答える。

「是非お話したいという方がおられて」

「はじめまして」

クルシナの横にいたケツアルが帽子を取り恭しく挨拶をする。頭は綺麗に禿げ上がっていた。

「結婚仲介人のケツアルと申します」

「ケツアルさん」

「はい。今回のお嬢様のご結婚のことでお話したいことがあります。参上しました」

「話すことなんてありませんよ」

マジエンカは口を尖らせてそう答えた。

第一幕その三

「今は」

「おやおや」

ケツアルはそれを聞いておどけた仕草をした。

「それはいけない。人の話はよく聞いた方がいい」

「聞きたくない時もあります」

「そんなこと言わずに」

「いえ」

ケツアルの言葉に耳を貸そうとしない。

「今はいいですから、本当に」

「あの」

そんな彼女を見てクルシナは心配そうな顔でケツアルに囁いた。

「大丈夫なんですか。今のマジエンカはちよつと」

「ああなつたら誰の言葉にも耳を貸さないんですよ」

ルドミラもそう囁いてきた。

「御心配なく」

だがケツアルはそれでも余裕であつた。

「こつしたことはいつもですから」

「そうなのですか」

「はい。ですからお任せ下さい」

「わかりました」

ケツアルは二人を納得させてから再びマジエンカに話し掛けてきた。

「まだ何かあるんですか？」

「ええ」

むくれたままのマジエンカに優しく声をかける。

「私の仕事は知っていますね」

「はい」

彼女は答えた。

「結婚相手との仲を仲介して下さるのですよね」

「その通り」

「それは有り難いですけど私は今は」

「もうお年頃なのに？」

「ええ」

むくれたまま言う。

「今は。いいですから」

「まあまあ」

ケツアルはまた彼女を宥めた。

「そんなことを言わずに」

「けど」

「貴女の一言で皆が幸せになれるのですよ」

「そうでしょうか」

「貴女ご自身も。悪い話ではありませんよ」

「私はそうは思いませんけれど」

「そんなことを言わずに」

「はつきり言いますけどね」

マジエンカはいい加減痺れを切らしたのか苛立った声を出した。

「私はもう好きな人がいるんです」

「えっ!？」

それを聞いて驚いたのはクルシナとルドミラであった。

「そうだったのか？」

「お父さんとお母さんには内緒にしてたけど。もう決めてるんです」

「そうだったのか」

雷に打たれたような感じであった。二人はそれを聞いて呆然としていた。

「何時の間に」

「ですがそれは一時のことではないですか」

だがケツアルはそんなことには慣れていいのか驚いた気配はない。

平然とマジエンカに対して話を続けた。

「恋人と生涯の伴侶は違うものなのです」

「恋人が生涯の伴侶となるんじゃないんですか？」

「それはまだ浅い」

ケツアルは勿体ぶってそう述べた。

「人の心なんて秋の空、風の中の羽根みたいなものです。その恋人とやらもどうせすぐに別の幸せを見つけるでしょう」

「何でそんなことが言えるんですか？」

「知っているからですよ」

ケツアルは答えた。

「こうした仕事をしているとね。よくわかります」

「私はそうは思いません」

「今はね」

「これからずっと。私は誓ったんです」

「誰にですか？」

「彼に。結婚しましょうって」

「それは神にこそ誓うものですよ」

「婚約したのよ」

「初耳だぞ」

クルシナはそれを聞いてまた驚いた。

「一体何時の間に」

「どうということなの！？」

ルドミラもであった。そしてまたケツアルに囁く。

「無理なんじゃないですか？」

「婚約してるというじゃありませんか」

「大丈夫です」

それでもケツアルは動じてはいない。禿た頭がキラリと光った。そしてその禿頭を指差した。

「何故私の頭がこうなのか御存知ですか」

「いえ」

「これはね、今までの仕事の勲章なのです」

「勲章」

「はい。こうしたことは何度でもありました」

「はあ」

「けれどそれを全て解決してきた。知恵を絞ってね。考えているうちにこうして髪の毛がなくなったのです」

「ではその頭は貴方にとって勲章」

「その通り」

大袈裟に、得意そうに頷く。

「普通の人にとっては禿は不名誉、ですが私にとっては勲章です」
「何と」

「ですからお任せ下さい。この縁談必ずや成功させてみましょう」
そしてまたもやマジエンカに声をかけてきた。

「花婿さんはね、素晴らしい人ですよ」

「けれど私にとって素晴らしいとは限りません」

これは事実であった。人それぞれであり相性というものもある。

また立場も。ある人にとって素晴らしい人が他の人にとってそうだとはいえないのである。

「ですからいいです」

「しかし私は誓ったのです」

「誰にですか？」

「貴方のご両親と向こうのご両親に」

「そんなこと知らないわ」

「ご両親でも」

「ええ。お父さん、お母さん」

マジエンカは席を立てて両親に対して言った。

「私はこの縁談絶対に受けないからね」

そして頬を膨らませたままその場を後にした。後には三人だけが残った。

「ふむ、気の強い娘さんだ」

「感心してる場合じゃありませんよ」

クルシナがケツアルに対してそう言う。

「実際に困ってるんですから」

「私は困ってはおりませんよ」

ケツアルは涼しい顔でそう答えた。

「私はね」

「何か御考えが」

「無論。問題は簡単です」

「はあ」

「要は貴方達の娘さんと私の推薦する若者を結婚させればよいのですから。ほら」

ここで一枚の紙を取り出した。

「これを御覧下さい」

それは契約書であった。既にサインまでしてある。

「これがあるのですからね」

「見せて頂けますか」

「どうぞ」

見ればそこに書いてあった。ルドミラは字を読めないがクルシナは何とか読める。それでたどたどしく読みはじめた。

そこにはミーハという名でサインがしてあった。クルシナのサインも。クルシナの娘とミーハの家の息子を結婚させるとその契約書には書いてあった。

第一幕その四

「神に誓つて、そこにはありますね」

「はい」

「我々には神がついておられます。御安心下さい」

「そうですか。しかし一つ疑問があるのですが」

「何でしょうか」

「何故そのミ―ハさんとこの息子さんをここへ案内して下さらなかつたのですか？」

「むっ」

クルシナにそう言われてケツアルは一瞬だが嫌そうな顔をした。

「彼と娘を直接会わせればもうちょっと簡単に進むと思うのですが」

「実はね」

ケツアルは表情を元に戻して二人に対して説明した。

「彼は内気な若者でして。女の子と話するのに慣れていないのです」

「そうなのですか」

「はい。純朴な若者でして。私はそうした若者の代理もやっているのですよ。ですから彼には少し待っていてもらったのです」

「そうだったのですか」

「ええ。ですが私も他に動く必要がありますね」

「といいますと」

「娘さんの恋人ですよ。彼を探さなければ」

「探し出されてどうされるのですか？」

「説得します」

ニヤリと笑ってそう答えた。

「それでね。充分ですよ」

「充分でしょうか」

「説得にも充分ありましてね」

彼はクルシナとルドミラに対して説明をはじめた。

「言葉だけではないのです」

「といいますと」

「おわかりになりませんか。袖の下ですよ」

実際に袖の下に手を入れる仕草をしながら説明をする。

「それで大抵はどうかなるのです。まあここは任せて下さい」

「それでしたら」

「お願いしますね」

「はい。ではこれで」

こうしてケツアルは二人に一礼してその場を去った。後には二人と周りにいる村人達だけが残った。だが村人達は三人の話なぞ知るよしもなく上機嫌で酒と食べ物を楽しんでいた。

さらに場が盛り上がった。ここで誰かが言った。

「いっちょ踊るか」

「よし」

それを受けて皆一斉に立ち上がった。老いも若きも前に出る。誰かが楽器を奏ではじめた。

踊りがはじまった。皆赤い顔で笑顔に包まれて踊っていた。

その教会から離れた別の居酒屋であった。イエニークはそこで仲間達と一緒に飲んでいた。

木造の質素な酒場であった。木は頑丈であり風が吹いてもびくともしそうにはない。椅子もテーブルでもある。黒っぽいその椅子とテーブルにイエニーク達は座っていた。そして酒を楽しんでいた。

「乾杯！」

彼等は木の杯を打ち合わせてそう叫んだ。まずは杯の中にある黄色く、白い泡が立っているビールを一気に飲み干した。そして機嫌のいい顔でこう言い合う。

「美味しいな」

「ああ」

「やっぱり酒はいい」

「百薬の長とはよく言ったものだ」

「全くだ」

「けれどもつといいものがあるよ」

ここでイエニークが仲間達に対してそう語り掛けてきた。

「それは何だい？」

「恋さ」

仲間達の問いにそう答える。

「このビールにしろワインにしろ恋人と一緒に飲むのが一番美味しいだろ」

「まあな」

仲間達はそれに頷いた。

「男同士で飲むよりはな。女の子と一緒に飲んだ方がいい」

「前に座っているのが恋人ならな。それはあんたに同意するよ」

「有り難う」

イエニークはそれを聞き満足そうに頷いた。

「有り難いね、わかってくれるとは」

「そういえばあんたあの娘とはどうなっているんだい？」

「？ああ、マジエンカのことか」

「マジエンカ！？」

それを店の側を通り掛ったケツアルが聞いた。

「今マジエンカと言ったかな」

そして耳をそばだてる。聴けば確かにマジエンカの話をしていた。

「うまくいつてるよ」

イエニークは上機嫌で語っていた。

「婚約もしたし。もうすぐ僕は彼女と一緒にになれるよ」

「それは何より」

「何よりではないわ」

ケツアルはイエニークの仲間達の言葉にそう突っ込みを入れた。

「そんなことされたらたまったものではない」

「けれど気をつけなよ」

店の中で仲間の一人がイエニークにそう言った。

「どうしてだい？」

「何でもあの娘最近親が縁談を進めてるっていうじゃないか」

「うかうかしていると御前さんも危ないんじゃないか？」

「ああ、あれね」

イエニークはその話を聞き少し考える目をした。

「それなら心配ないよ」

「何かあるのかい？」

「どうということだ」

仲間達はそれを聞き彼に問いケツアルは不安な顔になった。

「それはこれからのお楽しみ」

「おお、何か面白そうだな」

「面白い！？馬鹿を言え」

だがケツアルはそれを聞いて不機嫌な顔になった。

「商売の邪魔をされてたまるか。さて」

彼は店の入口の方に回った。

「情報収集じゃ。一体どんな奴か見ておかなくてはな」

そして店に入った。

「おかみ、席は何処だい」

「あそこはどうですか」

店のおかみは若者達がいる席のすぐ側を指差した。

「いいな。そこにしよう」

「はい。ご注文は」

「ビールとソーセージ」

彼はまずはそれを注文した。

「あとはジャガイモをふかしたものを。それでいい」

「わかりました。ではそれで」

「うむ」

彼はテーブルに着いた。そして飲みながらイエニーク達をチラリと見た。

（この中の誰だ、そのイエニークというのは）

まずはイエニークを探しはじめた。それはすぐに見つかった。

「ところでイエニーク」

「何だい」

黒いチヨツキの小粋な若者がそれに応えたのだ。

（あいつか）

ケツアルはすぐに彼に目星をつけた。

（あいつのせいでいらん苦勞をすることになるな）

舌打ちしたかったがイエニークに聞かれるのを警戒してそれは止めた。そして言った。

「恋は確かに大切なもの」

「ええ、勿論」

イエニークはそれに乗ってきた。

「わかって頂けますか」

「しかしもっと大切なものがありますな」

「それは？」

「お金です」

ケツアルは笑ってそう答えた。

「お金は恋よりも大事だと思いますが」

「いやいや」

だがイエニークはそれを笑って否定した。

「お金は作ろうと思えば作れるものです」

「はい」

「ですが恋はそうはいかない。恋は作ろうと思っても作れませんからね」

「ほう」

ケツアルはそれを挑戦状と受け取った。だがそれを顔に出すわけにはいかなかった。

「それを証明して頂きたいですな、いずれ」

「喜んで」

「おいイエニーク」

ここで仲間の一人が声をかけてきた。彼はその手にギターを持っている。

「踊らないか？俺が演奏するからさ」

「お、いいね」

応えながらケツアルに顔を向けてきた。

「どうですか、貴方も」

「いや、私はいいです」

ケツアルは愛想笑いをしてそれを断った。

「今はビールを楽しみたいので。宜しいでしょうか」

「それなら」

無理強いはしなかった。彼はケツアルから顔を離し席を立った。そして他の仲間達に対して言った。

「踊るか。僕の幸せの前祝いに」

「よし！」

ギターの演奏がはじまった。そして皆踊りはじめた。この辺りの民族舞踊であった。

ケツアルはその踊りと音楽を拝見しながらビールを飲んでいた。一人これからのことについて思いを巡らすのであった。

第二幕その一

第二幕 二人の若者

村の外れの森の側。そこに一人の若者が座り込んでいた。

茶色の髪に赤っぽい顔をしている。童顔でそれ程男前とは言えない。顔立ちは悪くはないが何処かぼんやりとした感じを与える。大人しそうな顔だ。

青い服に白いズボンを身に着けている。服から見るとわりかし裕福な生まれのようである。それ故か本当にぼんやりとした若者であった。

「お、そこにいたか」

切り株の上に座り込んでいる彼に樵が話し掛けてきた。

「ヴァシエク、またどうしてこんなところにいるんだい？」

「あ、おじさん」

ヴァシエクは名前を呼ばれて顔を上げた。

「ちよつとね、考え事をしてたんだ」

「一体何についてだい？」

「うん、ちよつとね」

ヴァシエクは樵に困ったような顔をして応えた。

「今僕のお父さんとお母さんが僕の結婚のことで話を進めてるよね」

「ああ」

「それがね、心配なんだ」

「どうしてだい？」

「僕の好きな人が相手じゃないんじゃないかなあ、って。もしそうなったらどうしよう」

「何だ、相手のことを知らされていないのかい」

「うん」

ヴァシエクは力なくそう答えた。

「一体どんな人なのかなあ。エスメラダ先生だったらいいけれど」

村の学校の先生である。ヴァシエクより少し年上だ。気が強いが頭の回転が早い美人だ。ヴァシエクは彼女に密かに憧れているのである。

「できたら先生と一緒になれたら」

「それは御前さんの親父さんとお袋さんに言うべきじゃないのかい？」

「うん」

ヴァシエクはまた頷いた。

「僕だつて言いたいけれど。何か怖いんだ」

「どうしてだい？」

「反対されるから。そうしたら何もかもお終いだし」

「おいおい」

樵はそれを聞いて呆れたような声を出した。

「そんなんじやあ何をやつても駄目だぞ。いいかヴァシエク」

見るに見かねた樵が彼に対して語りはじめた。

「男つてのはなあ、度胸だ」

「そうなの？」

「御前さんにはまだないがな。度胸が全てなんだ」

樵は胸をドン、と叩いてヴァシエクに対してそう言った。

「度胸なんだ、いいな」

「そうなんだ」

「それで女なんてのはな、押し通せばいいんだよ。一に押す、二に押す」

「押してばかりなんだね」

「そうさ。三も四も押す、そして最後まで押し通すんだ。俺はそれで今のかみさんを手に入れたんだ」

ここで自慢気に笑った。

「どうだ、わかったか」

「ううん」

しかしよくはわかっていないようであった。首を傾げる。

「そうなのかなあ。僕にはよくわからないや」

「わからないでは樵どころかかみさんの貰い手もねえぞ」

「わかってるけど」

「じゃあ話を変えよう。心だ」

「心」

ヴァシエクはそれを聞いて顔を上げた。

「そう、心だ。御前さんは少なくとも心はいい」

「うん」

「それを使え。そうしたら幸せになれるぞ」

「そううまくいくかなあ」

それでも不安であった。

「御前さんは鈍臭いからなあ。けれどまあ神様は見ていてくれるからな」

「神様が」

「ああ。少なくとも神様は見捨てやしないさ。御前さんみたいなのは」

「だといいいけれど」

「はつきり言っちゃうとな、度胸や頭がなくても心さえよければ生きていけるのさ。だから御前さんだって大丈夫だ」

「うん」

「だから安心しな。今回のことだって大丈夫だからな」

「だといいいけれど」

「そんなにエスメラダ先生がいいのなら神様がそうしてくれるさ。

それを待つてな」

「わかった」

ヴァシエクは頷いた。

「じゃあ神様をお願いしてみるよ。有り難う」

「ははは、神様にそれは言いな」

樵は笑って手を振りながら森の中に入って行った。ヴァシエクはそれを見送るとまた座って考えだした。

「神様かあ」

樵に言われたことをぼんやりと思い出しながら考えていた。

「お願いすると先生と一緒にになれるのなら」

空を見上げながら言う。

「お願いしよう。先生と一緒になれますように」

空に向かつて祈った。純真な祈りであった。

そんな彼の側に一人の少女がやって来た。彼とは違って利発そうな可愛らしい少女であった。

「あれがヴァシエクね」

それはマジエンカであった。彼女は物陰からヴァシエクを覗いていた。

「何かあんまり賢そうじゃないわね。悪い人じゃないみたいだけれど」

一目でヴァシエクを見抜いていた。そして彼の様子を見る。

祈りを終えたヴァシエクは側に置いてあった弁当の蓋を開けた。

そしてパンや果物を食べはじめた。丁度おやつの時間であった。

「うっ」

マジエンカはそれを見て空腹を覚えた。彼女も育ち盛りなのですからぐにお腹が減るのだ。

だがここは我慢が必要であった。ぐっところえてヴァシエクの方へ歩み寄った。

「ねえ」

「何？」

ヴァシエクに声をかける。すると彼は顔を上げてきた。

「貴方がヴァシエクね」

「うん」

彼は答えた。

「そういう君は？」

「私のことはいいわ。それよりね」

「うん」

ここで突っ込むべきだったのであろうがぼんやりとしているヴァシエクはそれをしなかった。それが迂闊だった。

「貴方確かクルシナさんとこの娘さんと結婚するのよね」

「そういうことになってるね」

ヴァシエクは浮かない顔でそう答えた。

「あまり気が乗らないけれど」

「あら、どうして？」

マジエンカはそれを聞いてしめた、と思った。

「僕はね、実は好きな人がいるんだ」

「誰かしら」

「それはちよつと」

「誰にも言わないから教えてくれないかしら」

「誰にも言わない？」

「ええ」

マジエンカは頷いた。

「約束するわ。誰にも言わないわ」

「それなら」

それを聞いて納得した。そして言った。

「エスメラダ先生だよ」

「エスメラダ先生？ああ、あの人ね」

マジエンカにもそれが誰なのかわかった。この村の学校の先生であつた。気が強くて頭もいいしっかりした女の人であつた。

第二幕その二

（成程ね）

それを聞いて頷くものがあつた。

（彼には確かに似合っているかもね）

「ねえ」

ヴァシエクはあらためて尋ねてきた。

「どう思ふかな、君は」

「貴方と先生のこと？」

「そうだよ。先生と一緒にになりたいのだけれど」

「いいと思うわ」

心の中で私じゃないから、と呟きながら言う。

「そう思う？」

「ええ。少なくともクルシナさんとこの娘さんよりはずっとね。い

いと思うわよ」

「ところでさ」

「何？」

「そのクルシナさんとこの娘さんだけどどんな人？君は何か知ってるみたいだけれど」

「聞きたい？」

「うん。どんな人なのかなあ」

「ここだけの話だけれどね」

あえて声を顰めさせた。

「うん」

「最悪よ」

「最悪！？」

ヴァシエクはそれを聞いて思わず声をあげた。

「ええ。あれはとんでもない女よ。絶対にやめた方がいいわ」

「そ、そうなの」

マジエンカのことを知らないヴァシエクはそれを聞いて大いに驚いた。

「あら、知らなかったの？村では有名だったけれど」

「し、知らないよ」

ヴァシエクはブルブルと首を振ってそれに答えた。

「そんなに酷いの」

「底意地が悪くて怠け者でお金に汚くて。しかも浮気者よ」

よくもまあ自分のことをそれだけ悪く言えるものだといひそかに感心していた。

「どう、先生とマジエンカ、どっちがいいかしら」

「そんなの答えるまでもないじゃないか」

ヴァシエクは少し興奮しながらそう言葉を返した。

「先生だよ、絶対に先生がいい」

「嘘じゃないわね」

「僕は神様に誓っているんだ」

彼は強い声でそう返した。

「絶対に嘘はつかない、悪いことはしないって。神様だけじゃなくて誰にでもそう約束できるよ」

「じゃあわかったわ」

マジエンカはそれを聞いて満足そうに頷いた。

「貴方は先生と結婚しなさい。いいわね」

「うん。けれど一つ問題があるんだ」

「何かしら」

「母さんのことなんだ」

ヴァシエクは弱々しい声でそう漏らした。

「お母さんの？」

「うん。それをどうするか」

「ねえヴァシエク」

マジエンカはヴァシエクに問うてきた。

「何？」

「貴方このままそのとんでもない女と一緒にになりたいのかしら」

「そ、それだけは嫌だよ、絶対に」

またブルブルと首を横に振る。

「絶対に。何とかならない？」

「じゃあお母さんは関係ないわね」

「うん」

ヴァシエクは頷いた。

「そういうことよ。貴方がやることは一つよ」

「一つ？」

「ええ。お母さんにね、言うのよ」

「何て言えばいいの？」

マジエンカに顔を向けて問う。

「この結婚は嫌だつて言うの。マジエンカとなんか結婚したくはないってね」

「それだけでいいんだね」

「それだけよ。それで貴方は幸せになれるわ」

そして私もね、とまた心の中で呟く。

「いいかしら、それで」

「うん、うん」

彼は何度も強い調子で頷いた。

「じゃあ決まりね。先生には貴方から言えばいいわ」

「僕から？」

そついわれて急に弱い顔になった。

「何かあるの？」

「そんなこと言えたら最初からこんな気持ちにはならないよ」

彼は沈んだ顔と声でマジエンカに対してそう言った。

「僕はね、言えないんだ」

「あら」

「先生にも誰にも。これも凄く困っているんだ」

「そうね。じゃあ先生には私から言っておくわ」

「頼めるかな」

「任せて。私そうしたことは得意なんだから」

自分の為にも絶対に何とかしなければならぬと固く思った。本音ではエゴだが今はそれは隠した。ヴァシエクを助けることが結果として自分自身を助けることになるとは皮肉なものだと思つてはいるが。

「それでいいわね」

「うん。お願いできるかな」

「任せて。それじゃあね」

「さよなら、親切な娘さん。君のことは忘れないよ」

「ありがと。それじゃあね」

別れながら悪い印象は受けなかった。あまり頭の回転は早くはないようだがどうにも悪い人物ではない。むしろ素朴で善良な人物だ。そんな若者を騙すのは気が引けるがここは自分の為であつた。

（それが同時に彼の為でもあるなんて）

それが今一つわからなかったがここは動くことにした。何はともあれ自分自身の幸せの為であつた。マジエンカは果敢に動くことにした。

第二幕その三

その頃イエニークは先程の酒場でケツアルと二人で話していた。仲間達とは別れ彼等は今はもう別の場所に楽しくやっている。

「ケツアルさんと仰いましたね」

「はい」

二人はテーブルに向かい合って座っている。酒も食べ物もなく話に専念していた。

「僕に用件とは」

「他にもありません。貴方の恋人のことですが」

イエニークはそれを聞いておおよそのことは見当がついた。だがそれは顔には出さなかった。

「それが何か」

「いえね、お願いがありました」

「はい」

「別れて頂けないでしょうか」

「面白いことを仰いますね」

イエニークはそれを聞いて不機嫌な顔を作った。

「一体何の権限があつて僕にそう言われるのか」

「権限ですか」

「ええ。大体貴方は何者ですか？」

「私？結婚仲介人ですよ」

「ああ、礼金を謝礼としておられるのですね」

「左様。以後お見知りおきを」

「そう言つて頭を垂れる。」

「宜しく願ひします」

「残念ですが僕は貴方のお世話にはならないでしょう」

「何故ですか？」

「僕はもう決めた人がいるからです。それがマジエンカです」

「つまり断る気はないと」

「ええ」

「どうしても」

「どうしても、です」

彼は強い声でそう答えた。

「左様ですか。ふむ」

ケツアルはここでビールを注文した。

「喉が渴きましたな。ご一緒にどうですか」

「貴方のおごりですか」

「勿論です。私がお話している立場なのですから」

「商売人としてのツボは押さえている。ここは彼をおごることにした。」

「ささ、どうぞどうぞ」

黒ビールが運ばれてきた。二人は杯を打ち合ってからそれを飲んだ。濃厚なビールの味と香りが二人の口の中を支配した。

「美味しいですな」

「ええ。この店のビールは評判なんですよ」

イエニークはそれに答えた。

「美味しいとね。それでは話を続けましょうか」

「ええ。彼女は約束したのですよ」

「彼女が約束したのではないでしょう？」

「ま、まあそれはね」

ケツアルはイエニークのその言葉に戸惑いながらも答える。

「彼女の両親がですよ。あと花婿の両親が」

「花婿の両親は誰ですか？」

「ミーハさんです」

「ミーハ？ああ、あの二人ですね」

イエニークはそれを聞いて表面上は何もなかったように頷いた。だが心の中では笑っていた。

ケツアルは非常に用心深く見ていれば彼の顔が僅かに変化したこ

とに気付いたであろう。だが残念なことに彼は別のことを考えていてそれには気付かなかった。

「御存知ですか？」

「名前だけはね。確かこの村で一番の長者さんです」

「はい、その通りです。そのミーハさんと約束したのですよ」

「何と？」

「彼女とミーハさんの息子を結婚させるとね。ほら」

そう言いながら懐から契約書を出してきた。

「あ、貴方字は読めますか？」

「ええ」

イエニークはそれに頷いた。

「ふむ」

そしてその契約書を読みはじめた。確かにそこにはクルシナの娘とミーハの息子を結婚させるとある。確かにそう書かれていた。

「確かに書いてありますね」

「はい。クルシナさんの娘さんとミーハさんの息子さんですね。確かに」

「クルシナさんの娘さんはマジエンカさんお一人ですね」

「ええ」

「そしてミーハさんの息子さんはあのヴァシエク君だけ」

「あれ」

だがここでイエニークは思わせぶりに笑いながら首を傾げてみせた。

「何か不都合でも？」

「いえいえ」

だがイエニークは左手を横に振ってそれを否定した。

「何もありません。お気になさらずに」

「そうですか。それで宜しいですね」

「まあそうですね。それでですね」

「はい」

「そのヴァシエク君は一体どのような若者ですか？」

「気のいい若者ですよ」

ケツアルはそう答えた。

「性格はね。かなりいいです」

嘘は言っではないなかった。だが肝心な部分は何一つ言っていないのである。こうした話の常ではある。そうしたところでも彼は商売人であつた。

「そうですか」

「ええ。彼のことは御存知ない」

「そうですね」

イエニークは答えた。

「名前だけは聞いたことがありますけれど」

彼もまた肝心なことは言わなかった。イエニークはケツアルのそれには気付いていたがケツアルはイエニークのそれには気付いてはいなかった。これが大きな差であつた。

「左様ですか。では本題に入りましょう」

「はい」

二人はビールをまた飲んだ後で話を再開した。

「それですね」

「はい」

「彼女と別れてはくれませんか」

「ミーハさんとこの息子さんと結婚させる為ですね」

「そうです。おわかりになられましたか」

「一応は。ですが」

「貴方はまだお若い。相手なぞ幾らでもおりますよ」

彼はそう言つてイエニークを宥めにかかった。

「それにそれだけ男前なのですから」

「男は顔じゃありませんよ」

イエニークは笑つてそのお世辞に返した。

「男は心ですよ。真心です」

「いや、お金ですよ」

「お金なんてものはね」

彼は言った。

「ちよつと頭を使えば幾らでも手に入りますから」

「強気ですな」

「それが世の中というものですよ。さて」

「はい」

ケツアルは彼に顔を向けた。

第二幕その四

「どうやって僕に引いてもらうつもりなのですか？仰って下さい」

「何だと思いますか？」

「さて」

彼はとぼけてみせた。

「暴力ではないのは確かですね」

見たところケツアルにそんな力はない。ひよろ長い身体をしており見るからに力はない。武器といえば傘だけだ。だがこれが何の役に立つだろうか。精々雨をよけるだけしか役に立たない。

「私は暴力は嫌いです」

彼の方でそれはきっぱりと否定した。

「何しろうちのやつに毎日ひっぱたかれておりますから」

「そうだったのですか」

「ええ。ですからそんなことはしません」

意外にも恐妻家であるらしい。そう言われてみればそんな感じもしないわけではない。

「私はあくまで仲介屋です」

「はい」

「私の信念はお金にあります」

「お金に」

「お金ですか」

「そう、そしてそのお金を使うことにしましょう」

要するに買収である。これは実によくあることであった。

「幾らならよいでしょう」

「ちよつと待って下さい」

イエニークは不機嫌な顔を作ってみせた。

「何か」

「僕を買収するつもりですか」

「それは人聞きの悪い」

「では何故」

「私からのほんの気持ちですよ。ほんの気遣いです」

「気遣いですか」

「ですから是非受け取って下さい。宜しいでしょうか」

「ふむ」

イエニークはそれを聞いて考えるふりをした。あくまでふりである。

「マジエンカの家には何があるか御存知でしょうか」

「勿論」

ケツアルはイエニークの問いに快く答えた。

「かなりの資産家でありますな」

「僕はそれよりも彼女の方が大切ですけどね」

「またそんな。彼女だけですか？」

「僕はそうですよ」

臆することなくそう返す。

「先程も言いましたがお金とかは頭を使えば出て来るものですから」

「ふむ。強気ですな」

「それは貴方だって同じだと思いますが」

「私も？」

「ええ。貴方は紙と舌で仕事をしておられますね」

「ええ」

「だったら同じですよ。人間というのはそういうものです」

「今一つ意味がわかりませんが」

ケツアルは首を傾げながらそう述べた。

「ですがお話を続けてよいですね」

「ええ、どうぞ」

「二匹の子牛、子豚、家鴨にガチヨウ、それに田畑までありますな」

「よく考えればどの家にもありそうなものですね」

「むっ」

ケツアルは言葉に詰まったがすぐに返した。

「それに食器も。それはどれだけの価値があると思われますか」

「そうですね」

イエニークはまた考えるふりをした。そしてケツアルに問うてきた。

「貴方はどう思われますか？」

「私ですか？」

「ええ。幾らの価値があると思われますか」

「そうですね」

ケツアルは真剣に考えながら自分の意見を述べた。その顔は本当に真剣なものであった。

「一〇〇グルデン程でしょうか」

「何だ」

イエニークはそれを聞いて呆れた声を出した。

「それだけの財産がそれだけか。いや、マジエン力を忘れるのにその程度で」

「不ですかな」

「不服ではありませんよ」

ムツとしたケツアルにそう言葉を返す。

「ただその程度か、と思っただけです。マジエン力を忘れるのにたった一〇〇グルデンとは。いやはや」

「では二〇〇ではどうですかな」

ケツアルはお金を倍にしてきた。そしてイエニークを見据えた。

「それなら文句はないでしょう」

「単に倍にただけではありませんか」

しかしそれに対する彼の声は冷ややかなものであった。

「それで誰かを納得させられるとでも？ 僕も含めて」

「うぬぬ」

ケツアルの顔が怒りで赤くなった。

「ではどれだけあればよいのですかな」

「お金の多さではないのですよ」

イエニークはそう述べた。

「誠意です」

「誠意!？」

「そう、貴方のね。誠意を見せて頂きたいのです。宜しいでしょうか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ケツアルはそれを聞いて沈黙してしまった。今まで赤くなっていた顔が急に白くなってしまった。どうやら落ち着きを取り戻したようである。

「わかりました」

そしてそう答えた。

「私も結婚仲介人です。では誠意を見せましょう」

「その誠意とは」

「三〇〇グルデンです」

それが誠意であった。

「これではどうでしょうか。貴方にとっても充分な誠意の筈ですが」
「ふむ」

イエニークはまたしても考えるふりをしてみせた。だがやはりケツアルはそれに気付かない。

「誠意ですね、確かに」

「はい」

ケツアルはそれを聞いてニヤリと笑った。勝ったと思ったからだ。

「私の誠意、理解して頂けたようですね」

「はい。ですが誓約書に書かれている言葉ですが」

「はい、これですね」

ケツアルはまたイエニークにその誓約書を見せた。イエニークはそのある部分を指し示した。

「ここですね」

「ここ」

「そう。ここにクルシナの娘はミーハの息子と結婚するとありますね」

「はい」

「ミーハの息子と。これに間違いはありませんね」

「勿論です」

ケツアルは胸を張ってそう答えた。張りすぎて帽子がずれ頭の一部分が見えてまぶしい程であった。

第二幕その五

「私は嘘は申しません」

「わかりました」

今度はイエニークがニヤリと笑った。

「それではそこをとりわけ覚えておいて下さいね」

「はい」

ケツアルは得意満面でそれに頷く。

「喜んで」

「わかりました。それでは僕もそれに誓いましょう」

「何と誓われるのですか？」

「マジエンカはミーハの息子以外の誰の妻にもならない、とね。これを誓いましょう」

「わかりました」

二人は互いにニヤリと笑ってそう言い合った。だがその笑いはよく見るとそれぞれ全く違うものであった。それに気付いていたのはやはりイエニークだけであった。

「これで満足でしょうか」

「まだあります」

「何でしょうか」

それを聞いたケツアルの顔が急に不機嫌なものになる。だがイエニークは言った。

「ミーハの息子とマジエンカが婚礼をあげそれを神が承認されたならば」

「はい」

「ミーハの父親は棄権しなければならない。宜しいですね」

「何だ、そんなことですか」

彼はそれを聞いて安心して笑顔になった。また金でも取られるのかと内心警戒していたからである。

「それならいいですよ。それでは」

契約書にそう書いた。

「あとその棄権はクルシナからの借金について。それもいいですね」
「ええ」

それを書いた。ケツアルはそれをイエニークに見せてまた問うた。

「これで宜しいですね」

「確かに」

イエニークは遂にそれを認めた。

「僕は三〇〇グルデンを手に入れた。これでいいですね」

「はい。私も。それではイエニークさん」

「はい」

「ご機嫌よう。新しい恋を見つけられるように」

「わかりました。ではこれで」

「はい」

ケツアルは帽子をとって彼に一礼した後で酒場を後にした。後にはイエニーク一人が残っていた。彼は何か食わぬ顔でまずはビールをまた注文した。

「どれにしますか？」

「黒を」

彼はにこりと笑ってそう答えた。

「今は黒がいい。何か腹黒い気持ちになれるから」

「おやおや」

おかみさんはそれを聞いて思わず笑ってしまった。

「また変なことを言うね。一体どうしたんだい？」

「ははは、洒落さ」

イエニークは笑ってそう返した。

「けれど黒が飲みたいのは本当だよ。たっぷりとね」

「あいよ」

「あとはソーセージをね。茹でたやつを」

彼の好物である。何かいいことがあった時はいつもこれを食べる

のである。そう、いいことがあった時には。黒ビールも同じであった。

「さてと」

彼は黒ビールとソーセージを前にして一人意を決した顔になった。
「あのおじさんはとりあえずはこれでいいな」

木のフォークを手にし、一本のソーセージにブスリと突き刺す。
肉汁がその中から溢れ出てきた。

それを口に入れる。腸を噛み破ると口の中に肉の旨味が広がっていく。そしてそこには玉葱のものもあった。この店のソーセージは中に玉葱も入れているのだ。

それを食べた後でビールを口にする。ソーセージの旨味とビールの苦味が口の中で混ざり合った。

「問題は皆をどうやって信じさせるかだな」

彼はここでひとまずフォークを置いた。

「皆僕をマジエンカを売ったと思っているな。恋人を売った卑しい奴だと」

ソーセージから湯気が出ている。それを見るとまた食べたくなくなった。

またフォークを手にとりそれを食べる。そしてまたビールを飲む。飲みながら考える。酒が頭の回転を助けてくれていた。急に頭の中が回りはじめる。

「マジエンカを売ったと思われるのはしゃくだけれど」

実はそれは彼にとっても本意ではなかったのである。

「それをどうするか、だな。さて」

ソーセージとビールを味わいながら考える。

「お金と恋なら恋の方がずっと大事に決まっている」
その信念は変わらない。

「お金なんて幾らでも手に入る。だけれど恋はそうはいかないんだ」
恋は人によつては決して見つけないものである。手に入れられない者すらいる。偶然手に入る場合もあればどうやって

も手に入れられない場合もある。恋の神というのは非常に気紛れな存在でありその心は移ろいやすい。イエニークにもそれはわかっていた。

第二幕その六

「恋程価値のあるものはない。お金なんかで買えはしないのはわかっている」

今の自分と矛盾する行為であつてもだ。

「三〇〇グルデンなんかで売れるものか。マジエンカを失う位なら死んだ方がましだ」

だが彼はケツアルからその金を受け取る事になった。それは何故か。

「恋を捨てるのなんて論外だ。恋は手に入れようとすれば逃げてしまふ。望んでもこちらにはやって来ない。そんなものをどうして売れるというんだ」

矛盾していた。そしてその矛盾については彼もよくわかつていた。

「マジエンカの為だ、全ては」

どうやらその三〇〇グルデンもまたマジエンカの為であるらしい。真相はまだ彼にしかわからないが。

それを今わかつているのは彼だけであつた。そう、ケツアルもマジエンカもわかつてはいなかった。マジエンカに至つては今の時点では売られたことすら知らないのである。

「マジエンカ、見ていてくれ」

彼は最後にまた呟いた。

「君の為に僕は戦っているんだ。それは最後でわかる」

「皆さん」

ここで店の外からケツアルの声がした。

「来たか」

予想通りであつた。彼はケツアルがここに戻つてくることを予想していたのだ。しかも証人達を連れて来て。彼は一人密かに身構えた。

「ここですよ、ここに彼がいます」

「しかし本当ですか」

店の外で男の声がする。

「何がですか？」

「イエニークのことですよ」

「それですか」

「ええ」

もう声は扉のすぐ前にまで来ていた。

「彼がそんなことを。信じられません」

「信じられるも信じられないもこれは事実です」

ケツアルはそう答えながら扉に手をかけた。

「それを今から皆さんに証人になって頂くのです。宜しいですね」

「わかりました」

そして扉が開かれた。ケツアルの後ろには大勢の村人達がいた。

（来たな）

イエニークはそれを見て心の中で身構えていた。

「やあイエニークさん」

ケツアルは勝ち誇った顔で彼に話し掛けてきた。満面に笑みを浮かべている。

かべている。

「先程のお話のことですが」

「はい」

彼は顔を向けてきた。顔はビールのせいでほんのりと赤くなっている。

「さっきのお話ですか」

酔っているふりをしてみせた。ケツアルを油断させる為である。

「はい。それも宜しいですね」

「ええ。三〇〇グルデンに関して」

「皆さん、聞きましたか」

彼はそれを聞くと村人達に嬉しそうな顔を向けた。

「彼は今三〇〇グルデンと言いましたね」

「ええ」

村人達は何が何かわからないままそれに頷いた。

「それでは話を続けましょう」

そしてまたイエニークに顔を戻した。

「イエニークさん」

「はい」

彼は座ったまま答える。

「そちらの席に戻って宜しいでしょうか」

「ええ、どうぞ」

彼はそれに応えた。

「構いませんよ、どうぞこちらに」

そして先程まで彼が座っていた目の前の席を薦めた。ケツアルはそれに従いそこに着いた。その周りを村人達を取り囲む。イエニークも囲まれる形となった。

「それでは」

ケツアルは席に着くと懷に手を入れた。

「まずは先程の契約書ですね」

「はい」

イエニークはビールを飲みながらそれに応える。目はケツアルに向けている。

「これですが」

そしてそれをイエニークの前に出してきた。村人達が見やすいようにわざわざ広げる。

「ここに書いてあることに間違いはありませんね」

「ええ」

ビールを飲みながら素っ気なく答える。

「確かに。間違いありません」

「クルシナの娘は」

ケツアルは嬉しそうに言う。字の読めない者に言って聞かせるのだ。

「マジエンカのことだな」

皆それを聞いてヒソヒソと囁き合う。

「ミーハの息子以外とは結婚することはできない」

「ヴァシエクのことか」

皆それを聞いてまた囁き合った。

「これで間違いありませんね」

「はい」

イエニークは頷いた。

「確かにその通りです」

「何！」

村人の中にはそれを聞いて激昂する者までいた。

第二幕その七

「イエニーク、それは本当か！」

「嘘じゃないんだな！」

「まあまあ皆さん」

ケツアルはそんな彼等をここは宥めた。

「怒られないように。これはもう決まったことですから」

「うつむ」

彼等はそれを聞いて何とか感情を抑えた。だがその顔は怒ったままであつた。何とか理性で抑えているといった感じであつた。

「詳しいことはこちらに」

ケツアルは契約書を見せながら村人達に対して言う。

「読めない方は読める方に聞いて下さい」

読める者がそれを見る。そこには確かにケツアルの言ったことがそのまま書かれていた。間違いはなかった。

「イエニーク」

村人達はあらためて彼を睨みつけた。

「そんな奴だつたんだな。見損なつたぞ」

だが彼は涼しい顔でソーセージを食べビールを飲んでいる。批判など何処吹く風といった様子であつた。

「自分の恋人を売るとはな」

「しかもはした金で。そんなに金が欲しいのか」

「皆さん」

ケツアルはここで善良そうな顔で一同に対して言った。

「お金は何よりも大切なものですが」

「あんたにとつてはな」

彼等は冷たくそう言い放った。

「だがこいつは違っていたんだ。少なくとも今まではそう言っていた」

「それが急にマジエンカを売ったんだ。どういうことかわかるな」
「よくあることです」

だがケツアルの声は素っ気ないものであった。

「そうではないですか」

「あんたにはどうやらわからんみたいだな」

「人生を長くやっていればわかりますよ」

それでもケツアルの答えはシニカルなものであった。

「かみさんと長くいるとね」

恐妻家故の言葉であった。

「まあいいでしょう。イエニークさん」

「はい」

「サインがまだでしたね。サインをして頂けますか」

「わかりました」

ケツアルからペンを受け取った。鳥の羽根のペンである。

「ここですね」

「はい」

指差したところにペンを持ってくる。既にインクはつけている。

「イエニーク」

村人の中にはクルシナもいた。彼はイエニークを睨みつけながら声をかけてきた。

「クルシナさん」

「確かに俺はマジエンカとミーハさんの息子さんとの結婚を承諾した」

「はい」

「だがあんたのことは認めてきたつもりだ。しかしそれは誤りであったみたいだな」

「そうですか」

イエニークの返答はやはり素っ気ないものであった。

「あんたみたいな恥知らずは知らん。一体どういっつもりなんだ」
「そっだそっだ」

他の村人達もそれに続いた。

「イエニーク、見損なったぞ」

「御前はそんな奴だったのか」

「おい答える」

「返事をしろ、どうなんだ」

「ケツアルさん」

だがイエニークはそれに答えずにケツアルに顔を向けていた。そして彼に問うた。

「それではサインをしますね」

「ええ、どうぞ」

彼はニンマリと笑っていた。そしてイエニークがサインをするのを見守っていた。

「これでよし」

「はい」

サインをした紙をケツアルに見せる。これで決まりであった。

「本当にしやがったよ」

「信じられないわね」

「とんでもない奴だ」

村人達は口々に言う。だがイエニークは涼しい顔をしたままだ。そのままケツアルに対して言葉が続ける。

「間違いないですね」

「はい」

ケツアルもほくほく顔で頷く。

「これで間違いなく。いやあ、助かります」

「マジエンカはどうなるんだ」

クルシナはそれを見て忌々しげに呟いた。

「呆れた話だ。こんなことがあつてたまるか」

「その通りだ」

村人達も彼と同じ意見であった。

「そんなに金が大事か」

「恥知らずが」

彼等は口々にそう非難し続ける。だがイエニークはやはり涼しい顔をしたままであった。

第三幕その一

第三幕 最後は幸福に

イエニークのことはすぐに村中に広まった。それを聞いて憤りを覚えない者はいなかった。

「とんでもない話だな」

「全くだ」

「マジエンカが気の毒だ」

彼等は口々にそう言い合う。だがその中で一人別のことを考えている者がいた。

「どうなるのかなあ」

ヴァシエクは自分のことだけを考えていた。そして一人溜息をついていた。

「母さんも父さんも反対するに決まってるし。僕に味方はいないのかな」

「あら、ヴァシエクじゃない」

そこに黒い髪の小柄な女性がやって来た。赤い民族衣装に身を包んでいる。その顔立ちは如何にも利発そうで可愛らしいものであった。美人ではなかったがよい印象を受ける顔であった。

「あ、先生」

「どうしたの、こんなところで」

黒い翡翠の様な目で彼を見上げる。ヴァシエクはそれだけで胸の鼓動が高まるのを感じていた。この黒い髪と目の女性がエスメラダである。ヴァシエクの想う人である。

「ちょ、ちょっと考えていまして」

「何を考えていたのかしら。言ってみて」

「けど」

だがヴァシエクは口籠もってしまっていた。

「先生にはあまり関係のないことですし」

「私には関係のないこと」

「は、はい」

彼はそう言つて誤魔化した。

「そうなの。何だかわからないけれど」

それ以上聞こうとはしなかった。気にはなつたがとりたてて聞くまでもないと思つたからだ。

「まあいいわ。それじゃあね」

「はい」

「それにしても。私も早く身を固めたいわ」

そう言いながらエスメラダは何処かへ行つてしまった。ヴァシエクはその後ろ姿を見送り一人溜息をついた。

「ああ」

そして側にあつた切り株の上に腰掛ける。それからまた溜息をついた。

「はつきり言えたらなあ。どうして言えないんだろう」

彼にとつてそれがツ最大の悩みであり苦しみであつた。

「何とかしたいけれど。何にもできないな」

困つていた。だがそんな彼を神は決して見捨ててはいなかった。

「あれか」

それを遠くから見ると一つの影があつた。

「話には聞いていたけれどあまり活発そうじゃないな。どうやら噂通りみたいだ」

「先生に何とか告白したいけれど」

「先生？ははあ」

その影はそれを聞いてその先生が誰かすぐにわかつた。

「あの人が。何だ、あいつはあいつで困つていたのか」

影はそれに気付いてにんまりと笑つた。

「これは好都合だ。あいつを先生と一緒にさせればさらにいい」

「けれどどうやって先生と一緒になろうか」

「そんなのは簡単だな」

「ああ、どうすれば」

「頭は抱える為にあるんじゃないさ。考える為にあるんだ」

そう言うヴァシエクの前に出て来た。黒い上着と白いズボンの若者であった。

「君は？」

「僕かい？この村の者さ」

「そうだったの。はじめまして」

「はじめまして。ところで君はヴァシエク君っていうんだね」

「はい」

ヴァシエクは答えた。

「ミーハさんとこの娘さんと結婚する予定らしいね」

「ええ」

それにも素直に答えた。なお素直さは時として命取りにもなる。

「けれどあまり嬉しそうじゃないね。どうしてだい？」

「それは」

彼はここで口ごもった。

「エスメラダ先生と結婚したんだろ、本当は」

「えっ」

思っていたことを言われてギョツとした。

「何でそれを」

「わかるさ。君の顔に書いてあるから」

「僕の顔に」

「そうさ。君は結婚したいんだろ、先生と」

「はい」

「けれどそれはお父さんとお母さんが反対するから言えないんだな」

「わかりますか」

「わかるさ。僕は君のお父さんとお母さんも知っているからね」

お母さんと言ったところで彼の顔が一瞬だが歪んだ。しかしヴァシエクはそれには気付かなかった。一瞬であつたしぼんやりとした彼には気付かないことであつたからだ。

「それでも本音じゃ何とかしたいだろ」

「はい」

「けれどどうしたらいいかわからない。違うかな」

「どうしてそんなことまでわかるんですか？」

「僕は何でも知っているのさ」

「若者はにこりと笑ってそう答えた。」

「何でもね」

「まるで嘘みたいだ」

「嘘じゃないさ。僕は君に対しては嘘はつかないよ」

「本当ですか？」

「ああ。だから僕の言うことをよく聞いてね」

「はい」

「ヴァシエクは頷いた。」

「お願いします。どうしたら先生と一緒になれますか？」

「それはね。ケツアルさんがいるね」

「結婚仲介人の」

「彼に言うんだ。この村の娘さんと結婚するって」

「けどそれじゃあわからないんじゃない？」

「わかっていないね。この村の娘さんだよ？」

「それが何故」

「君はマジエンカと結婚する予定だね」

「はい」

「マジエンカはこの村の娘さんだね」

「ええ、そうですけど」

「そしてエスメラダ先生も。この村の生まれだよね」

「あっ」

そこまで言われてようやく気付いた。イエニークはそれを見て心の中で思った。

（やはりとろいな）

しかしそれは心の中だけであった。外見上は冷静にそのまま言葉

を続ける。

「これでいいんだ。後は先生をどう納得させるかだけれど」

「それはどうすればいいですか？」

「またケツアルさんをお願いしよう」

「ケツアルさんに」

「そう。あの人にエスメラダ先生のことを頼むんだ。確かあの人もそろそろ身を固めたいと思っていた筈だし」

「都合がいいですね」

「人間の世界ってやつはね、神様に都合よくできているのさ」

イエニークの言葉は少しシニカルであった。

「要は神様がどう考えて何をしたいのか、それをわかっていればいいんだよ」

「そうなのですか」

「そうさ。じゃあいいかい」

「はい」

「先生にはね、こう言ってもらうんだ。この村で自分を真剣に愛してくれる若者と結婚したい、とね」

「自分を真剣に愛してくれる若者」

「それは君のことさ。これでわかったね」

「成程、そういうことだったのですか」

「そうさ。まあそっちはそれで大丈夫かな」

「はい、有り難うございます」

「ちよつと待った」

だがイエニークはここでヴァシエクを呼び止めた。

第三幕その二

「ケツアルさんにはね、いい話があるって言って切り出すんだよ」
「いい話が」

「そうさ。あの先生はお金が好きだから。儲け話には飛びついてくるよ」

「本当に貴方は何でも知っているんですね」
「ヴァシエクは思わず感嘆の声を漏らした。」

「素晴らしいです。どうしてそんなに」

「色々あったからね」

ここでまた表情が一瞬曇った。だがヴァシエクはそれには気付きはしない。

「色々と」

「うん。まあそれは君には関係ないことさ」

「そうですか」

「だから気にしないでいいよ。それより」

「はい」

「後肝心なのはマジエンカのことだけれど」

「マジエンカ」

それを聞いたヴァシエクの表情が一変した。イエニークもそれに気付いた。

「どうしたんだい？」

「彼女とだけは嫌です」

「何かあったのか」

「あったと何もとんでもない女の子らしいですね」

「とんでもない」

「はい。我が儘で浮気者だとか。僕そんな人と一緒にはなりたくはないです」

「おやおや」

話を聞きながら好都合だと思った。だが彼はここで別のことを考えていた。

（誰かに吹き込まれたのかな）

「ねえ」

彼はヴァシエクに尋ねた。

「そのマジエンカのことは誰から聞いたのかな」

「誰から」

「うん。何かとんでもない娘みたいだけれど」

「可愛い娘さんからです」

「可愛い娘さんから」

「はい。小柄で青い目に金色の髪の毛。ぽっちゃりしていました」

（ああ、彼女か）

イエニークにはすぐに見当がついた。

（向こうも向こうで動いていたか）

それがわかり内心ほくそ笑んだ。中々面白いことになっていると思っただ。

「その娘に言われたんだね」

「ええ。それは本当でしょうか」

（何と答えようかな）

ヴァシエクを見ながら考える。彼は如何にも不安そうにしている。それを見て決めた。

「その通りさ」

ここは彼女の言う通りにした。

「そうなんですか」

「そうさ、だから絶対に止めた方がいい」

「絶対に」

「彼女と結婚したら君は不幸になる」

「不幸に」

「人生は滅茶苦茶になってしまう」

「そんなに」

「そうさ。だから彼女との結婚は絶対に止めた方がいい。わかったね」

「は、はい」

真っ青になってそれに頷く。ぶんぶんと首を急かしく縦に振る。

「これでわかったね。君はエスメラダ先生と結婚するべきだ」

「はい」

「間違つてもマジエンカと結婚しちゃ駄目だよ。いいね」

「わかりました」

「それならよし。じゃあ行ってくれ」

「何処に」

「ケツアルさんのところだよ。すぐに行つた方がいい」

「わかりました」

こうしてヴァシエクもすぐに姿を消した。行く先は決まっていた。イエニークは彼を見送つて一人ほくそ笑んでいた。

「これで手は全て打つたかな」

しかしまだやるべきことはあつた。そして彼は動いた。

「最後はやっぱり彼女を何とかしないと」

そう言いながら彼も何処かへ去つた。後には誰も残つてはいなかった。次の騒ぎの前置きであるかのように沈黙がそこを支配していた。

ケツアルに話をしエスメラダにそう言ってもらつたヴァシエクはまた一人ぼんやりと考えていた。

「これで僕と先生は結婚できるのかなあ」

そう思うと嬉しいがやはり不安はあつた。

「できたらいいけれど」

もしできなかったならば、そう思うと不安で仕方ないのである。それでも考えずにはいられない。そこへケツアルがやって来た。

「ヴァシエク君、ここにいたか」

「あ、ケツアルさん」

彼はケツアルに顔を向けた。

「どうしてここに」

「どうしてって君を探していたんだよ」

彼はそう答えた。

「僕をですか」

「そうさ。まずはエスメラダ先生だけれど」

「はい」

「この村で自分を真剣に愛してくれている人と結婚するそうだと承諾してくれたよ」

「本当ですか!？」

「ああ。そして君のことだけれど」

「はい」

「この村の娘さんと結婚するんだね」

「はい」

ヴァシエクはそれに頷いた。

「間違いありません、その通りです」

「ふむ、ならいい」

彼はそれを聞いて納得した。

「何か引つ掛かるが」

「気のせいですよ」

慌ててそう返す。

「そうかな」

「そ、そうです」

さらに慌てて言い繕う。

「だから気になさらないで」

「だといいいけれどね」

半信半疑ながらとりあえずは納得することにした。そして話を進めることにした。

「あの娘がこの村の娘であることには変わりないしな」

「ええ」

「じゃあこれにサインをお願いできるかな」

そして懷から新しい契約書を出した。そこにはヴァシエクがこの村の娘と結婚すると書いてあった。クルシナの娘ではなくなっていた。だがミーハの息子の部分だけは同じであった。

「いいかい」

「はい」

「おお、そこにいたのか」

しかしここで地味だがパリツとした民族衣装に身を包んだ中年の男女が姿を現わした。見れば男は何処かヴァシエクに似た顔をしていて髪はイエニークのものと同じ色であった。女の方は髪と目の色がヴァシエクと同じであった。

「あ、お父さんお母さん」

ヴァシエクは二人を見てそう言った。

「どうしてここに？」

「どうしてって探したんだぞ」

二人はとぼけた様子のヴァシエクに対してそう言葉を返した。

「一体何処に言っていたのか。心配したんだ」

「そうだったの」

ヴァシエクはそれを聞いて申し訳なさそうな顔になった。

「御免なさい、心配かけたね」

「わかればいいんだけどな」

「結婚するんだから。もう少ししっかりして欲しいわね」

「いや、ミーハさんハータさん」

だがケツアルはそんな二人を安心させるように穏やかな声で二人の名を呼んだ。

「何か」

「御心配には及びませんよ。私がヴァシエク君についておりますから」

そう言つて胸を張った。次にその胸を左の拳でドンと叩く。

「そうですか」

「はい、ヴァシエク君は絶対にマジエンカさんと結婚できますよ」

「マジエンカと」

それを聞いたヴァシエクの顔が青くなった。

「そうだったら僕は不幸に」

「何かあったのかい？」

ケツアルだけでなく彼の両親もそんな彼を見て心配になった。

「何かあればお言いよ」

ハータは特に心配そうであった。母親であるが為か。

「う、うん」

「御前には絶対に幸せになって欲しいからね」

「幸せに」

「そうさ。だからしっかりしておくれ。いいな」

「うん」

ヴァシエクは母親に言われながらもその顔を青くさせたままであった。だがここで先程の若者と新しい契約書のことを思い出した。

そしてその青い顔を元に戻した。

第三幕その三

「わかったよ。僕幸せになる」

「そう、そうなっておくれ」

ハータはそれを聞いてようやくほっとしたようであった。

「そうでなければ困るから」

「善人は幸せにならなければなりません」

ここでケツアルはこう言った。

「ヴァシエク君、だから君は幸せになるんだよ」

「なれますか」

「神様がそうしてくれるさ」

「間違いないですね」

彼は急に元気になってそう問うてきた。ケツアルはそれに少し面食らいながらも言葉を返した。

「勿論だよ」

「そうか、なら大丈夫ですね」

「少なくとも君にはね」

「はい。じゃあ僕は結婚します」

「うん」

「この村の娘と。そして幸せになります」

ここで彼は村の娘とだけ言った。ケツアルもミーハもハータもそれはマジエンカのことばかり思っていた。だがそれは果たしてどうなのか。彼等はよく考えてはいなかった。

「なあマジエンカ」

マジエンカの家の前でクルシナとルドミラがマジエンカに話をしていた。わりかし立派な家である大きく、しかも新しかった。煉瓦の家であり小屋に水車もあった。

「信じてくれないか」

「どうして信じられるのよ」

マジエンカはむくれた顔で両親にそう言葉を返した。

「お父さんもお母さんも嘘を言っているのよ」

「嘘だと思うのかい？」

ルドミラが娘にそう尋ねた。

「親が娘を騙すとも思うのかい？」

「わし等が御前に一度でも嘘をついたことがあるか？」

「うう」

その通りであった。二人は村でも正直者として通っている。マジエンカに対してもそうであった。彼女は両親が嘘をついたことを見たことも聞いたこともなかった。

「確かにそうだけれど」

「ならわかるな」

「いえ」

しかし首を横に振った。

「それでも信じられないわ」

「どうしてなんだい」

「わしはこの目と耳で確かめているのだぞ」

「それはわかるけれど」

マジエンカは戸惑いながら言った。

「それでもどうしても信じられないの」

「わし等の言うことでもか」

「だって」

マジエンカはまた言った。

「イエニークが私を売ったなんて。それもお金で」

「しかし本当のことなんだよ」

「彼はお金にはあまり執着していないわよ」

「しかしだな」

「いつも頭を少し使えば手に入れられるって言ってるし」

「頭を使えば、だな」

「ええ」

マジエンカは父の言葉に頷いた。

「いつも言っているわよ。それが何かあるの？」

「それだ」

クルシナはその言葉を指摘してきた。

「頭を使えば、と言ったな」

「ええ、確かに」

「それなんだ。あいつは悪知恵を使っただ」

「悪知恵を？」

「そうさ。それで御前を売っただ。金を手に入れる為にな」

「まさか」

「しかし本当だとしたら？」

「そんな筈ないわ」

狼狽しながらもそう答える。

「だって彼は」

「わしの目と耳が証人だ」

「お父さんの言葉を疑うのかい？」

「そんなことはないけれど」

マジエンカの顔が次第に困ったものになってきた。暗い雲が覆いはじめていた。

「けれど」

「否定しきれるか？」

「・・・・・・」

マジエンカは遂に答えられなくなってしまった。父が嘘についているとは思えないからだ。

「な、わかつたろ」

クルシナはここで娘に対して言った。

「御前は売られたんだ、あいつに。裏切られたんだ」

「もうあんな男のことは忘れておしまい。それが御前の為なんだよ」

「そうなの」

「そうさ。いいね、マジエンカ」

ルドミラの声がさらに不安に覆われていく。

「大人しくミィハさんの息子さんと結婚しなさい。少なくとも御前を騙したりはしないから」

「私を騙すなんて」

「もう一度言うぞ」

クルシナの声が険しくなった。

「私が御前に嘘をついたことがあるか!？」

「………いえ」

頷いた。遂にそれを認めたのであった。

「お父さんが私に嘘をつくなんて。考えられないわ」

「そういうことだ」

「マジエンカ、わかったね？」

「………ええ」

母の言葉にも頷いた。

「よく考えてみる。それで結論を出すわ」

「そうだ、それがいい」

「本当によくお考えよ。人間つてのは心が一番大事なんだから」

「心」

マジエンカは呟いた。二人は彼女を一人にした。よく考えさせる為であった。

一人になった。そして考えようとしたができなかった。かわりに涙だけが零れてきた。

「こんな………」

その青い目から大粒の銀の涙が零れる。

「こんなことって………」

信じられなかった。だが嘘ではない。それがわかっているからこそ辛かったのであった。

泣いていた。悲しかった。これ程悲しかったことはこれまでなかったことであつた。

涙が止まらない。それでも何とか考えられるようになった。しか

しそれでも信じられなかったのである。

「嘘よ、イエニークが」

彼が自分を売る筈がないとまだ思っていたのであった。

「彼から直接話を聞かないと。何もわからないわ」

だが何処にいるのか。それすらもわからなかった。

何とかしたい、だができない。そのジレンマが彼女を苦しめていた。

「彼がいなくなるだけでも耐えられないのに。そんなことが信じられる筈もないのに」

言葉を続ける。

「二人なら何処にいても平気なのに。私は夢を見ているの？ 恋の薔薇が散ってしまったの？ 一体何が起こったというの？ 私を不幸が覆っているの？ これはどういうことなの？」

混乱してきた。それでも涙は零れ続ける。それでもう服が濡れそばってしまった。

彼女は何処かへ去った。真実を知る為に。その真実が残酷なものであるかどうかはもう考えることができなくなっていたのだが。

そしてイエニークを見つけた。彼は教会の側の酒屋で一人黒ビールとソーセージを楽しんでいたのであった。彼がどういった時にそれを口にするのか彼女も知っていた。

「やあマジエンカ」

彼は今の彼女が何を思っているのか知らないのか軽やかに声をかけてきた。

「どうしたの、そんなに焦って」

「焦ってなんかいないわ」

マジエンカは憔悴した顔で彼にそう答えた。

「イエニーク、話は聞いたわ」

「話！？」

「とばけないで。三〇〇グルデンのことよ」

「ああ、あれか」

「!!」

それを聞いて真実だとわかった。彼女の顔が割れんばかりに壊れた。

第三幕その四

「本当だったの……」

「マジエンカ」

イエニークの顔が急に真摯なものとなった。そして彼女に声をかけてきた。

「話を聞いて」

「嫌よ！」

だが彼女はそれを拒絶した。

「それは本当だったのね！」

「ああ」

彼はそれを認めた。それがマジエンカの心をさらにかき乱した。

「署名したのね！」

「君に嘘は言わない」

「売った癖に！」

「売ってなんかいない」

「それが嘘なのよ！」

「マジエンカ」

イエニークの声がさらに真面目なものとなった。

「本当に話を聞いて欲しいんだ」

「私の耳は嘘は聞こえないの！」

彼女はそう叫んだ。

「そして私の口は真実しか言わない！」

「マジエンカ……」

イエニークはそれでも諦めない。何とか話を聞いてもらおうと努力していた。

「本当のことを聞いてくれないのかい？」

「それはお父さんから聞いたから」

「クルシナさんから？」

「そうよ」

彼が正直者であることはイエニークも知っていた。話がさらにややこしくなると思った。だがそれでも彼は言った。

「それでも聞いてくれないか」

「まだ嘘を言うの!？」

「嘘なんかじゃないんだ」

「それを嘘って言うのよ!」

そして言った。

「もういいわ、決めたわ」

「何を？」

「私結婚するわ、ミーハさんの息子さんと」

「ミーハさんの息子と」

それを聞いたイエニークの顔が急に晴れやかになった。マジエン力はそれを見てさらにいきりたった。

「それがおかしいっていうの!？貴女と結婚しないのよ!」

「君は今自分が何を言ったのかわかっているね」

「勿論よ」

キツとしてそう返した。

「何度でも言うわ。ミーハさんの息子さんと結婚するわ。また言いましょうか？」

「いや、いいよ」

彼はにこりと笑ってそれを制止した。

「ミーハさんの息子さんとだね。よくわかったよ」

「やっぱり」

マジエンカの顔が赤から青に変わった。怒りのあまり血の気が引いてきたのだ。

「私を売ったのね」

「それは違う」

「違うないわ!」

「だから聞いてくれって」

「聞くことなんか！」

「まあ待ちなさい」

騒ぎを耳にしてケツアルが仲介にやって来た。

「事情はどうあれ喧嘩はよくないですぞ」

「あ、ケツアルさん」

イエニークは彼の姿を認めて言い争いを止めた。

「丁度いいところへ」

「人々が必要とされるところに現われるのが私ですから」

彼はにこやかに笑ってそう返した。

「それで何のことでそんなに言い争っておられたのですか？」

「いえ、何」

イエニークは落ち着いて彼に言った。

「契約書のことだね。三〇〇グルデンの」

「何て白々しい」

マジエンカはそれを聞いてまた怒りはじめた。だがイエニークは冷静であった。

「あれは間違いありませんね」

「ええ、勿論です」

ケツアルは笑顔でそれに応えた。

「確かに。マジエンカさんはミールハさんの息子さんと結婚する」

「はい」

「そして貴方は三〇〇グルデンでその権利を譲った。確かにそうあります」

「そうですね。それはケツアルさんもよくわかっておられますね」

「ええ。イエニークさんの御好意は忘れません」

「好意！？何てこと」

マジエンカは怒ったままであった。

「私を売っておいて」

「まあマジエンカさん」

ケツアルが宥めるが一向に聞こうとはしない。

「私は彼をもう二度と見たくないわ」

「それで」

イエニークはそれを聞いて一瞬だけであるがその緑の目を悲しくさせた。しかしそれは一瞬だったのでマジエンカにもケツアルにもわからなかった。

「ミーハさんの息子さんで間違いはないんですね」

「何度でも申し上げますよ」

ケツアルは上機嫌であった。

「イエニークさんは承諾して下さいました」

「そう」

「三〇〇グルデンで」

「またお金の話！」

マジエンカはもうお金の話なぞ聞きたくもなかった。

「マジエンカさんとミーハさんとこの息子さんの結婚を認めて下さいました。それに間違いはありません」

「そうです。マジエンカ、聞いたね」

「裏切りを聞かせるつもりなの！？」

マジエンカは怖い顔になった。まるで魔女のようであった。

「違う、そうじゃない」

「私にはそうとしか思えないわ」

「信じてくれ」

「どうしたらそれができるのか私の方が知りたいわよ！」

「そうじゃない。はつきり言おう」

「何を！？」

イエニークを睨みつける。

「ミーハの息子は君のことを愛していると。これでもまだわからないのかい」

「そんなに私をあつ男と結婚させたいの！！」

さらに怒りが増した。これも当然であった。どう見ても火に油を注いでいるだけであるからだ。ケツアルもそれを見て流石に首を傾

げてしまっていた。

「彼は何を考えているのだろう」

それが最初の感想であった。

「こんなにあの娘を怒らせて。怒らせても何にもならないというのに」

彼の考えも当然であつた。普通ならそう思う。だがイエニークは全く違つたのである。これは彼が普通ではないからなのであるうか。どうも違うようである。

「いい加減にして！」

「だから信じてくれ！」

「人を呼ぶわよ！」

「呼べばいい！」

殆ど売り言葉に買い言葉であつた。

「それで君がわかつてくれるのなら」

「わかる必要はなんてないわ！」

「いや、待ってくれ」

ここで誰かの声が聞こえてきた。

「え！？」

それを聞いてマジエンカが少し落ち着いた。

「マジエンカ、まあ落ち着いて」

「気持ちわかるけれど」

見れば村人達であつた。彼等も騒ぎを聞きつけて集まつてきたのである。

「皆」

「話は知っているよ。イエニーク」

「うん」

彼は不思議な程落ち着いていた。少なくとも村人やマジエンカからはそう見える。

「本当に御前さんはとんでもない奴だな。まだ言つか」

「見損なつたよ。ここまで腐つた奴だつたなんて」

「女の子を泣かせて楽しいか？」

「別に泣かしてはいないよ」

彼はしれっとした態度でそう答えた。

「僕はマジエンカに本当のことを言いたいだけなんだ」

「一つ言っておくよ」

村人の一人がそれに応えた。

第三幕その五

「本当のことはな、時として人をどん底に落すものなんだ」

「人間なんてそんなもんだしね」

それに他の者も頷いた。

「知らなくていいことだつて一杯あるんだ」

「それを無理にでも教えようとするのは悪魔の行いだ」

「ましてやあんたは。売ったことをそれ程言い募りたいのか？どこまで恥知らずなんだ」

「そうだそうだ」

他の村人達もそれに同意する。

「あんたみたいな奴を見たことがない。何処まで卑しいんだ」

「恋人を売つて。そしてまだ騒ぎたてるなんて。それでもこの村の人間か」

「イエエーク！」

マジエンカも叫んだ。

「私このことを忘れないから！私を売ったことを死ぬ程後悔させてやる！」

「えっ、マジエンカ！？」

そこへヴァシエクもやって来た。彼はそれを聞いて驚きの声をあげた。

「あの」

「あれ、君は」

イエエークはヴァシエクを見て彼に顔を向けた。

「貴方は」

ヴァシエクの方も彼に気付いた。

「何かあったんですか？それにこの女の人は」

「まずい」

マジエンカはヴァシエクの顔を見て苦い顔をした。

「僕にクルシナさんとこの娘さんのことを教えてくれた人なんですけれど」

「！？どういうことだ」

村人達はそれを聞いて眉を顰めた。

「なあヴァシエク君」

「はい」

ヴァシエクに問う。彼は正直にそれに顔を向けた。

「君さっきこの娘さんからマジエンカについて聞いたと言ったね」

「ええ」

「それは本当なのかい？そしてどんなことを聞いたんだい？」

「本当です。そして浮気者で怠け者で派手好きなとんでもない人だと聞きました。だから絶対に結婚はしない方がいいと。これははっきり覚えていますよ」

「そうなのか」

村人達はそれを聞いて頷いた。

「マジエンカはヴァシエクとは結婚したくないのか」

「何か話がややこしくなってきたな」

「いやそうじゃないな」

しかしイエニークだけが笑っていた。

「これはかえって好都合だな。なあヴァシエク君」

「はい」

ヴァシエクに話を振ってきた。

「何でしょうか」

「君は本当は誰と結婚したいんだい？正直に言ってくれ」

「えっ」

それを聞いて戸惑った顔になった。

「けれど」

「僕が君の安全を保障する。それでも駄目なのかい？」

「本当ですね？」

「勿論だ」

「本当かね」

「まさか」

村人達は誰も信じようとはしない。だがヴァシエクは違った。何と彼はイエニークを信じることにしたのだ。

「わかりました」

「へっ!？」

それを聞いて皆眉を奇妙な形に曲げた。

「何だつて!？」

「ヴァシエク、正氣かい!？」

「はい」

彼は迷いもなくそう答えた。

「僕にもよくわからないけれど」

彼は戸惑ったままそう答える。

「この人は信じられる。そう思っんです」

「馬鹿な」

「どうやってたらそうそう考えられるんだ」

村人達は口々にそう言う。だがヴァシエクはイエニークを信じたのであった。

「僕の好きな人は」

「君の好きな人は」

「エスメラダ先生です。先生を真剣に愛しています」

「よし」

イエニークはそれを聞いて会心の笑みを浮かべた。そして村人とケツアルに対して言った。皆あまりのことに目をパチクリとさせていた。

「今の言葉、聞きましたね」

「聞きましたね、って」

「何が起こつたんだ。これは一体どういうことなんだ」

それはマジエンカも同じだった。怒りを忘れて呆然としていた。

「これはどういうことなの!？ヴァシエクがそんな」

「マジエンカ」

彼は前に出て来た。そしてマジエンカに声をかけてきた。

「何!？」

「あらためて言うよ。ミーハの息子は君を愛していると。この世の何よりもね」

「何よりも。けれどそれは誰なの!？」

彼女にはもうわけがわからなくなっていた。他の者でもある。

「どうなってるんだ!？」

「さあ」

もう誰にも何が起こっているのかわからない。イエニーク以外には。

「落ち着いてね」

「またその言葉を」

マジエンカはさらに訳がわからなくなった。

「どうして私にそんなに落ち着けっというの!？本当にわからないわ」

「君に真実を言う為さ」

「それも」

彼女にはわからないことばかりであった。他の者も。

「もう一度言う。ミーハの息子は君を愛しているんだ」

「けれどそれは僕じゃない」

「そうさ」

ヴァシエクに対してそう答える。

「君はマジエンカとは結婚したくはないんだね」

「はい」

「何っ」

それを聞いて驚いたのはケツアルであった。

「これは一体どういうことなんだ」

「ケツアルさん」

ヴァシエクが彼に顔を向けてきた。

「何だい」

「僕は村の娘さんと結婚するって言いましたね」

「ああ」

「けれど僕はマジエンカとは結婚するつもりはないんです」

「それはどういうことなんだ!？」

ケツアルもさらにこんがらがってきた。

「話がわからないのだが」

「僕にわかっておりますよ」

イエニークだけがその中で冷静だった。

「そのミ―ハの息子は」

「誰なの？」

マジエンカが問うた。

「今君の目の前にいる」

「えっ!？」

「けれど僕じゃない」

「そうさ。ヴァシエク、聞いたことはないかい」

「何をですか？」

「君のお父さんは今のお母さんと結婚する前に結婚していたね」

「あ、はい」

それはヴァシエクも聞いていた。

「そういえばそうでした。お父さんから聞いたことがあります」

「うん。もう亡くなってしまったけれど」

「はい。凄く綺麗な人だったって。お父さんが話していました」

「そのお母さんのことで聞いたことは他にないかい？」

「他にですか」

「そうだ。覚えているかな、何か」

「ええと」

そう問われて考え込んだ。必死に思い出していた。

「確か」

「確か？」

「僕のお兄さんがいたとか」

「えっ!？」

それを聞いたケツアルが驚きの声をあげた。

「そんなことは聞いてはいないぞ」

「それは貴方の落ち度ですよ」

イエニークはやりわりとそう答えた。

「ちゃんと調べておくべきでしたね」

「何と。それは嘘だと思っていたのに」

「それでヴァシエク君」

「はい」

「そのお兄さんはどうなったかは聞いているかな」

「そうですね」

彼はまた考え込みながらそれに答えた。

「確か死んだとか。流行り病で」

「そう聞いたんだね」

「はい」

「けれどそれは嘘だ」

「えっ!？」

「彼、君のお兄さんは死んではないんだ」

「そうなんですか」

「何でそれを知っているのかね!？」

ケツアルが不安を抑えきれずイエニークにそう問うてきた。

第三幕その六

「君が」

「何故だと思いますか？」

「まさか」

マジエンカは余裕に満ちた笑みを浮かべるイエニークを見て気付いた。だが村人達は呆気にとられたままである。あまりにも色々と進んでいるので完全に取り残されてしまっていたのだ。

「何が何だか」

「そういえばミー八さんとここにいたような」

年配の者の中にはそう呟く者もいる。だが皆混乱していて何が何だかわかっていないのが実情であった。

「そのミー八さんの死んだとされちえる息子は」

「息子は」

皆ゴクリ、と息を飲んだ。固唾を飲んでイエニークの次の言葉を見守る。

「それは」

「それは」

だがここで場の空気が変わった。よりによってクルシナとルドミラ、そしてミー八とハータが来たのであった。

「マジエンカ、そこにいたのか」

「ヴァシエクも」

「お父さん」

「どうしてここに？」

「どうしてもこうしてもじゃないよ」

ミー八は息子に対してそう言った。

「好都合だな」

イエニークはミー八とハータの姿を認めて一人ほくそ笑んでいる。だがそれは誰にも気付かせはしなかった。周到であった。

「ヴァシエク、御前契約書の文章を変えてもらったそうだな」
「うん」

「村の娘さんと結婚するって。どういうことだ」

「それは……」

「説明してくれ。何故そうしたんだ？」

「口ごもる息子に対してそう問う。」

「怒らないから。言ってくれ」

「そうだよ。御前のことなんだからね。頼むよ」

「それは僕が説明しましょう」

「あつ！」

二人はイエニークの顔を見て思わず叫んでしまった。

「御前、どうしてここに！？」

「この村に帰っていたのかい！」

「ええ」

イエニークはにこりとして二人に対して答えた。

「この前に久し振りだね」

「やっぱり」

マジエンカはそれを見てわかった。顔が急に晴れやかなものとなつていく。だがケツアルはそうではなかった。彼はまだわかつてはいなかった。

「どういうことなんだ！？」

首を傾げていた。

「久し振りだなんて。知り合いだったのだろうか」

ミーハの息子のことには頭がいかなかった。そこが迂闊であった。

「戻ってくるなど言った筈だよ」

ハータがイエニークを睨みつけてそう言った。

「それでどうして」

「それは僕の自由なので」

イエニークは涼しい顔でそう言葉を返す。

「別に法律で追い出されたわけじゃないんだからね。違うかな」

「くっ」

「確かにそうだな」

ミーハは困った顔をして彼にそう述べた。

「だがな」

「言いたいことはわかってるよ」

イエニークは手で彼を制しながらそう言う。

「けれど僕は言わせてもらおうよ」

「何をだ!？」

「何を言うつもりなんだ、彼は」

村人達はさらに戸惑いの声を囁き合っていた。今はイエニークとマジエンカだけが冷静であった。

「マジエンカ」

イエニークはマジエンカを見ていた。

「イエニーク」

マジエンカもイエニークを見ていた。二人は互いを見ていた。

「今やつと言えるね」

「そうね、ずっと気付かなかったわ」

「まさか」

それを見てケツアルも村人達もようやく気付いた。

「彼は」

「ミーハさんとこの」

「君と一緒にになりたい。いいかな」

「ええ、喜んで」

マジエンカはイエニークを受け入れた。これで決まりであった。

「な、ど、どういうことなんだ」

ケツアルは憑き物が落ちたように騒ぎはじめた。

「彼がミーハさんの息子だなんて。こんなことがあるものか」

「言いませんでしたっけ」

ミーハは少し驚いた顔をして彼に問うた。

「いえ」

「あれ、おかしいな」

「私が言わなかったのよ」

ハータは苦虫を噛み潰した顔でそう言った。

「どうしてだい？」

「この村にいないと思ったから。いなかったでしょ」

「確かに」

ミーハはそれに頷いた。

「少なくともわしが今知るまではそうだったな」

どうもヴァシエクは彼に似たようである。見れば表情までそっくりであった。これが遺伝というものであるうか。

「だが一つ問題ができたな」

「何？」

「ヴァシエクのことだよ。イエニークがマジエンカさんと結婚してしまった。ヴァシエクには相手がいなくなった」

「ヴァシエク、御前はそれでいいのかい？」

「よくはないよ」

彼は母にそう答えた。何故か落ち着いていた。

「僕はマジエンカさんと結婚する予定だったみたいだから。けれども」

「けれど。何だい？」

「ヴァシエクの相手はちゃんというからな」

「うん、兄さん」

彼は今ここではじめて彼を兄と呼んだ。

「また兄さんの力を借りたいけれどもいいかな」

「ああ」

兄は弟に対して快く頷いた。そしてケツアルに顔を向けた。

第三幕その七

彼は我に返っていたが怒りに震えていた。まんまと出し抜かれたからに他ならなかった。言いくるめたつもりが逆に罠にかかっていったからであつた。彼は人を罠にかけたりするのは好きなタイプであるかも知れないが罠にかけられるのは嫌いであつた。

そんな彼に声をかける。

「ケツアルさん」

「何ですか」

ケツアルは不機嫌そのものの顔をイエニークに向けてきた。明らかに怒っていた。

「お話があるのですが」

「私には貴方のお話を聞く耳はありません」

彼はそう返した。声も怒っていた。

「そう言わずに」

「聞こえませんか」

耳を両手で塞いだ。

「ほら、こうしていますから」

「お金の話でもですか？」

「何!？」

どうやら耳に栓をしていてもお金の話は耳に入るらしい。不思議な耳である。

「今何と仰いました？」

「ですからお金の話と。お仕事の依頼ですよ」

「仕事の」

「はい」

イエニークは頷いた。

「どうでしょうか」

「額は」

「三〇〇グルデン」

「三〇〇グルデン」

それを聞いたケツアルの顔が一変した。

「それは本当ですか!？」

「はい」

イエニークはにこやかに頷いた。

「ヴァシエクとこの村の小学校のエスメラダ先生の結婚を仲介して欲しいのですが」

「三〇〇グルデンですか」

「はい。如何でしょうか」

「喜んで」

ケツアルはにこやかに笑ってそれを引き受けた。

「ヴァシエク君とエスメラダ先生ですね、それならお安い御用です」

「そんな簡単にいくんですか？」

ミーハは怪訝そうな顔をして彼に尋ねる。

「勿論です」

「確かヴァシエクとマジエンカの時もそんなことを言っていたような」

「今回は確実です」

彼も商売人である。自分のミスはそうおいそれとは認めない。

「何故なら今回は契約書に抜け道はないのですから」

「ほう」

「いいですか」

彼は胸を張って言いはじめた。

「ヴァシエク君はこの村の娘さんと結婚する」

「はい」

「抜け道まみれじゃないですか」

ハータがそれを聞いて突っ込みを入れる。だがケツアルは平然としていた。

「話は最後まで聞いて下さいね」

「はあ」

それに頷くしかないハータであった。彼は説明を再開した。

「エスメラダさんは彼を真剣に愛する者としか結婚できない。そしてその若者とは」

「僕です」

ここでヴァシエクが名乗りをあげた。

「僕も今ここで言います。エスメラダ先生を心から愛しています。そして先生と結婚したいです」

「何と」

「ヴァシエクも言ったぞ」

「あのはにかみ屋が」

村人達はまた驚きの声をあげた。

「何とまあ」

「驚き過ぎて心臓が破裂しそうだよ」

ミーハもハータも驚きを隠せないでいた。そこにまた誰かが現われた。

「話は聞いたわ」

「おっ」

皆その誰かの姿を認めて楽しそうな声をあげた。

「よく来てくれた」

「真打ち登場だな」

「どういたしまして」

誰かは村人達の声ににこやかに応えた。それは他ならぬエスメラダであった。

「先生」

「ヴァシエク君」

エスメラダは戸惑うヴァシエクに対して問う。両手首の付け根を腰の横にあて首を少し左に傾けている。

「話は聞いたわ」

「は、はい」

ヴァシエクはドギマギしながら彼女に応える。

「私と結婚したいそうね」

「え、ええ」

彼は震えていた。

「その通りです」

「さつきケツアルさんからもらった契約書だけれど」

「はい」

「私を心から愛してくれる人ってあるわね」

「ええ」

「それは誰なのかな、って思ったけれど君だったのね」

「駄目でしょうか」

「そうね」

エスメラダはここでくすりと思わせぶりに微笑んだ。

「一つ私からも聞きたいんだけれど」

「何ですか？」

「もし駄目って言ったらどうするの？」

「それは……」

ヴァシエクはそれを聞いただけで泣きそうな顔になった。

「言わないで下さい、そんなことは」

「じゃあもう決まったわね」

エスメラダはそう言ってにこりと微笑んだ。

「私が結婚相手に求める条件はね」

「はい」

ヴァシエクは顔を思いきりエスメラダに近づけてきた。それだけでもう首がちぎれそうである。

「一つだけなの」

「一つだけ」

「そうよ。私を愛してくれているかどうか」

「えっ」

それを聞いて声がうわずった。

「それは一体」

「聞こえなかったかしら。愛しているかどうか、私が必要なのはそれだけ。ヴァシエク、貴方はどうなの？」

「どうなのって言われても」

内気なヴァシエクはまごまごしている。

第三幕その八

「あの、その」

「私を愛しているの？　どうなの？」

「答えていいんですか」

「私は答えが聞きたいの。さあ早く」

「それなら」

ヴァシエクは意を決した。そして言った。

「先生が好きです。この世で一番好きです」

「本当に？」

「僕が嘘を言ったことがありますか？」

それがヴァシエクの取り得の一つであつた。

「先生もそれをよく御存知だと思いますけれど」

「まあね」

エスメラダはまた悪戯っぽく笑つた。

「だからここに来ていのだし。貴方が正直なのは皆知っているわ」

「はい」

「じゃあ決まりね。ヴァシエク」

「は、はい」

「貴方と結婚するわ。仲介屋さん、それでいいかしら」

「私の方は」

ケツアルはにこやかに頷いた。

「お金が入るのなら。例え火の中水の中」

「そういうことね」

「三〇〇グルデンも戻つたし。しかしですな」

「何か」

クルシナが彼に問う。

「よくよく考えれば」

「はい」

「私は今回はただ働きのものでは？三〇〇グルデンにしる元々はイエ
ニーク君に払ったものですし」

「そういえば」

「その三〇〇グルデンにしても」

「何かあるのですか？」

「ミーハさんからのお金です。結局私は今回一文の得もしていない
のではないかと思いますね」

「いや、それは間違いですよ」

ここでイエニークが前に出てそう言った。

「君に言われても納得しないよ」

「まあそう仰らずに」

不機嫌な顔を作ってみせるケツアルにあえて笑顔でそう返す。

「お金は大事ですよ」

「それは何度も言っています」

「けれどよく考えて下さい」

「考えるとお金が出ますか？なら幾らでも考えますよ」

「いや、お金から離れて」

「お金から離れると私のおつかない妻が瞼に浮かんできます」

ケツアルはさらに不機嫌になった。

「それだけは勘弁願いたいですな」

「奥さんだけですか？」

「まさか」

ケツアルはイエニークの言葉を一笑に付した。

「こう見えても私には子供がおりましてね」

「ほう」

「初耳ですな」

クルシナもミーハもそれに驚いているようだ。

「子供達の姿も思い浮かびます。そしてその子供達に温かいシチュ
ーを作ってやっている心優しいわたしの妻」

「そう、そうです」

そこまで聞いたイエニークが声をあげた。

「えっ」

「お子さんにシチューを作ってあげているのは貴方の奥さんですね」

「ええ」

「それですよ。何だ、ちゃんと奥さんを大事に思っているじゃないですか」

「むむむ」

「自分の心に嘘はつけませんよ。違いますか」

「確かに」

「ケツアルさん、あえて言います」

「はい」

「お金は確かに大事です。けれどそれは実はあまり重要ではない」

「頭さえ使えば手に入れられるからね」

「ああ」

マジエンカの言葉に頷く。

「けれど愛はそうはいかない」

「ええ」

「愛は簡単には手に入らない。そしてそれを手に入れられる者は」

「本当に幸せな人なんだ」

ヴァシエクが言う。その隣にはエスメラダがいる。

「その幸せを手に入れたならば」

「絶対に手放してはならん」

クルシナとミーハが言う。

「罰が当たるわよ」

ルドミラとハータも。ハータも息子の結婚が決まりホッとしていた。彼女もまた母親であることには変わりはない。その彼女がイエニークに声をかけてきた。

「イエニーク」

「何」

「ヴァシエクのことだけねどね」

「うん」

「有り難うね。おかげでほっとしたよ」

「弟だからね」

「弟」

「そうさ」

イエニークはそれに答えた。

「弟の為なら一肌脱ぐさ。それが兄だからね」

「兄なのかい」

「じゃあ僕はヴァシエクの何なんだい？」

「いや」

ハータは口ごもった。

「それじゃああたしは一体何になるのか。あんたを追い出したあたしは」

「お母さんさ」

イエニークはにこやかに笑ってそう答えた。

「過去は色々あったけれど。貴女は僕にとってお母さんだよ」

「そう言ってくれるのかい？」

「うん」

彼はにこやかな顔で頷いた。

「あらためて言わせてもらうよ、母さん」

「・・・・・・・・・・」

ハータはそれを聞いて何も言えなかった。今までの自分のあさましい行動が後悔となつて全身を打ち据える。それでも耐えられない程であつた。

何も言えなかった。ただ涙だけが出る。そこにミィハがやって来た。

「いいんだよ、もう」

彼は妻に対し優しい声でそう語り掛けた。

「わかつたのなら。わかればいいんだ」

「そうなの」

ハータは泣きながらそれに応えた。

「わかればいいのね」

「ああ」

ミーハはまた言った。

「イエニーク」

ミーハはイエニークに対し顔を向けた。

「お帰り」

「只今」

こうして彼等は親子に戻った。皆それを温かい目で見ていた。

「さて、と」

ここでケツアルがまた動いた。

「それでは皆さん、早速はじめますか」

「何をですか」

「決まっているではないですか、結婚式です」

彼はにこやかに笑ってそう答えた。

「二組の若者達の。場所は村の教会で」

「それが終われば酒場で祝杯を」

「そうです。如何ですか」

「喜んで。では行きますか」

「ええ。それでは」

村人達も動きはじめた。そしてイエニークとマジエンカ、ヴァシエクとエスメラダを取り囲んだ。

「主役達もおいで」

「はい！」

彼等もその中に入った。彼等の親達も。こうして一時の騒ぎが終わり祝福の時が来るのであった。

売られた花嫁

完

2
0
0
5
.
6
.
2
3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3587f/>

売られた花嫁

2011年4月28日00時40分発行